

別事井上道義、平壤でベートーヴェン『第九』を北朝鮮初演
特記2010年に続いて、朝鮮国立交響楽団に2度目の客演

取材・文=川畠裕一
Text = Yuichi Iwano

指揮者の井上道義が、2013年3月8日、北朝鮮・平壌の人民劇場で、ベートーヴェン「交響曲第9番『合唱』」を指揮した。「すべての人々は兄弟になる」と歌い上げるこの作品が北朝鮮国内で演奏されるのは、実に今回が初めてのことという。

演奏したのは、1946年に創設されてロレン・マゼールやチヨン・ミョンフンなども客演している朝鮮国立交響楽団。井上は2010年秋に初めてこの楽団に招かれ、ドヴァルジヤーク『新世界交響曲』などを演奏したが、オーケストラの高い能力に驚く一方で、国交のない日朝関係がどん底まで冷え切っていても、芸術家だからできる交流だけは絶やすべきでないと考え、「次はぜひ『第九初演』」といつ朝鮮側の懇請を、批判賞賛を受け入れた。

合唱を担当したのは万寿堂藝術團所属の声樂家約120名で、同團所属のソプラノ・金錦周、アルト・韓玉姫が、日本から参加したテノール・永田峰雄、バリトン・牧野正人とともにソリストをつとめた。井上による5日間のリハーサルの多くは声樂を伴う第4樂章に費やされたが、モスクワ留学組の女声ソリストは別にして、合唱のメンバーは初めて歌うドイツ語の歌詞にかなり苦労した様子だった。しかし、練習を重ねるにつれて、朝鮮半島出身の声樂家に特有な張りのある力強い歌声が聴かれるようになり、井上は不安なく本番を迎えることができたのである。



喝采に包まれた人民劇場。カーテンコールに応える出演者たち（中央が井上道義）



2012年4月にオープンしたモダンな人民劇場



朝鮮国立響を指揮する井上道義



朝鮮国立響を指揮する井上道義

A black and white photograph of a massive, modern stadium. The most prominent feature is its massive, curved roof, which is supported by a complex network of steel beams and appears to have a textured or ribbed surface. The stadium's exterior walls are also curved and appear to be made of a light-colored material. In the foreground, there are some trees and what looks like a paved area or entrance. The overall impression is one of a very large and impressive sports facility.

「多くの価値観の違いを持つアジアの国々の見えない壁、見える国境を、ぼくが生きている間に低くできるとは安易には考えていない。しかし愛するショーンの体制内で自分の考連の体制内で自分の考連を残したように、僕も想主義に徹して運命に

平壌市中心部の再開発エリアに建つ人民劇場は、2012年4月にオープンしたばかりのコンサート専用ホール。広い舞台と豊かな残響、ゆったりとした客席が特長の大ホールは1500人収容で、500人収容の小ホールも併設している。ロビーも広々としているが、喫茶コーナーや売店が皆無なのはお国柄か。プログラム類の印刷物も一切ない代わりに、演奏前に出演者のプロフィールや曲目解説がステージ上の字幕で紹介され、女性司会者が舞台から聴衆に語りかけるのは中国式に近い。意外だったのは、共産党関係の招待客ばかりと思われた客席のかなりの部分を、音楽

愛好家の一般市民が占めたこと。高額のチケットを買えるのはごく一部の富裕層に限られるとはいえ、聴衆

が愈々言葉少く、身も見難い様子で、始まるといつて、《アリラン》に続いて《第九》の演奏がはじまると、そこにはまだベートーヴエンの音楽だけが存在し、演奏が進むにつれて場内の集中度が高まる様子が肌で感じられた。演奏会当日の未明には、北朝鮮が2月に行つた核実験に対する国連安保理の制裁決議が公判され、我が国も経済制裁をさらに強化すると、いうタイミングだつただけに、井上の訪朝に對しては一部から強い非難の声が上がつた。賛否両論あるのは当然のこととして、井上が地元紙に寄稿した音楽家としての真情を紹介することで、この小文を締めくくりたい。

外 動 に と く